



骨董集上



詩
3
232
/



醒齋先生隨筆



骨董集上編

後帙 二卷

東都書肆 文溪堂梓

おほむね

一 おのれをやくすまふまよひをたぬあそびをせうばんしうのあそ
こどもぬきいでかまはあけのうたのうまきこむだそひてり海
をかくせれうらもらうむはしきまごぞたよりよたのうまきい
ばらふ白魚シメすまごのませうせんもほいあふればこまこのれかう
あんだいしういんぼくは海まはなすつかのうらふあうらう
よせうのふもこれ縁スナホは質朴なるいあ人のけりう海をまねひ
衣服キモノ飲食ヲシモノ調度テドやうのもれまごも身乃ほごよまごだこもこま
せそとりの乃めらつねをうらまごせんこま志はる縁まごねな
まごのまごこのむい人まもるを海ほがおひなりてこまみそりま
まごまごりたをうはいこえうなまごちまご
一 おもて正史實錄のあはれほむやけうまごむねこてこま

5番4冊

232

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts.

阿拉伯文小标题或页脚，包含上下两行文字。

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts.

事物紀原 卷三 宋朝會要を引く云「毬杖非古蓋唐世尚之以資

玩樂」のまじり唐の時盛んなり。聖武天皇の御時ハ唐の玄宗の時ハ

のまじり打毬のまじりなり。和漢同時とりべし。○唐の僖宗時ハ

好めり。僖宗帝ハ。御國の貞觀仁和の比ハあれし。○遼ハ

のまじり遼史 卷百 蓋臣傳下「耶律塔不也。以善擊毬。幸

於上。凡馳騁。鞠不離杖」と云えたり。淵鑑類函 卷三百 巧藝部八ハ

打毬の古事あり。詩篇歌ハをありし。戒られどそのまじりなり。これハ

ら心拳毬。○さき打毬より変り別れて。毬杖と稱。一種の玩具なるなり。ハ

ゆれば此より詳なり。其まじりハ「宇都保物語」小云えたり。中比の物ハ

ええし。源平盛衰記 卷二 云「法師の首を造。毬打の玉を打。杖を以て

あら打。毬蹴たり踏たり。様々小あり。大喪兒共態。此玉あり。物と同一ハ

是ハ當時ハ用え給。ハ太政入道の首也。と答。軍家物語 卷。文覚上人

骨董上編 下之前一

斐岐國一流。これハ時。後鳥羽院を。毬打の冠者。そを母とわ。後とのあり

乃ら。こを。毬打の玉を。此君のまじり。此君のまじり。此君のまじり。此君のまじり

「しる。まじり」とあり。義經記 卷。本若き。まじり。まじり。まじり。まじり

ら。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり

と名付。一ツを。清盛が。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり

ら。の條。云。十節録。黃帝云。取。蚩尤。頭。毬。之。取。眼。射。之。

云。毬。杖。是。也。云。以。彼。例。漢。土。年。始。用。件。事。國。中。無。凶。

事。例。日。本。國。學。其。例。年。始。打。毬。杖。云。日本。戰。時。記。云。毬。打。の。事。ハ

徒然草 下之卷 四十四段 「さき。ら。まじり。ハ。正月。小。打。ち。の。まじり。ハ。正月。小。打。ち。の。まじり

神泉苑。出。て。焼。あ。る。あり。云。托。字。往。來。改。年。初。月。托。宴。

毬打。云。こ。まじり。ハ。毬。打。の。事。ハ。毬。打。の。事。ハ。毬。打。の。事。ハ。毬。打。の。事。ハ



宇都保物語 祭使巻よ云「騎射

そとと後りどもこまきりて
すひのそびあつたのちかひある
玉をど後りどもめあつたあはげ
ついであつた後りどもまきり杖を
めらしてあつたびとちかちか
ゆきまきり今の本よまきり杖をまきり懐よ
作るあやまれりて 按ざりて四月をうりて

○打毬樂之圖



詞花堂模藏

は外山茶人
二人が
装束して
たくり
これと

骨董上編 下之前二

よとまきりうりの亭うてあつ

らくて令人ども打毬樂のよと

えらうのそびあつたあはげ

玩具の毬杖のよとくづれ

よとまきり玩具の毬杖ハ打毬

遊よりうりてあつたあはげ

玉を打をまきりびとちかちか

そのもまきり毬杖のよとひ玉打もひとあつた打毬ハ鞠よと玉の形よと

ゆらぎれいなり。述古の毬杖のよとまらた玉の形よと寛文六年の訓蒙書彙よ

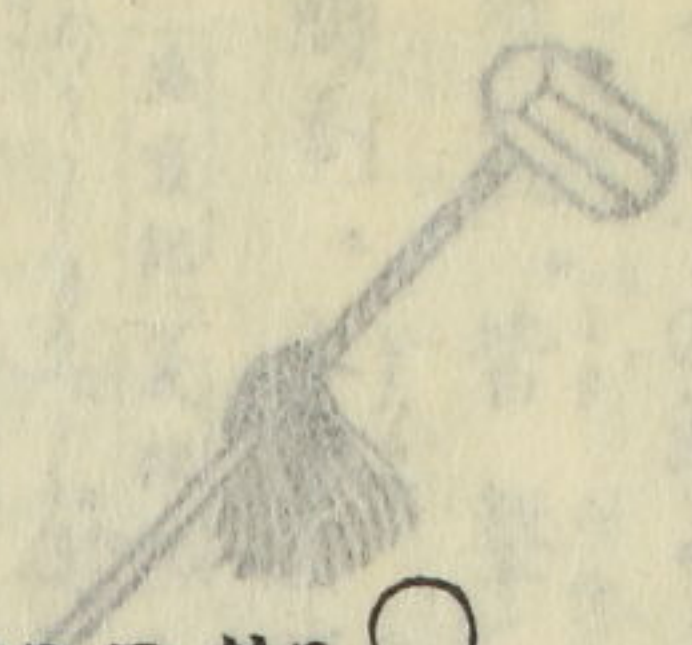
載る音やに物とをて考へありへり。○のうへに騎射の後よあつた打毬

樂を奏しりよや。源氏物語 螢の巻よ五月五日の節會よ騎射競馬を

あつた後よ打毬樂落躰あつた音樂のりよととんえたり 花鳥餘情



小児の目を多むさむるの... 次つぎの年の正月あたらの男児おとこをぶらぐりぐりを
 かくる女児めいごの飾かざりをかくる。醒さまの宝曆たから以前いぜんの月つきに
 是等これらの飾かざりをかくる。小児こども三歳さんさいをかくる。但たゞ此事このことを
 まるの希まれなる物ものなり。



○今制速杖いませいそくじょう杖じょう

推おしの柄えの端はしを... 尺せき一尺八寸いちせちはちすん許ゆるぎ
 土つちをつ... 紙かみを剪きり... 胡こ粉こな丹に緑りく青せい
 糸いとをつ... 組くみ織おり...



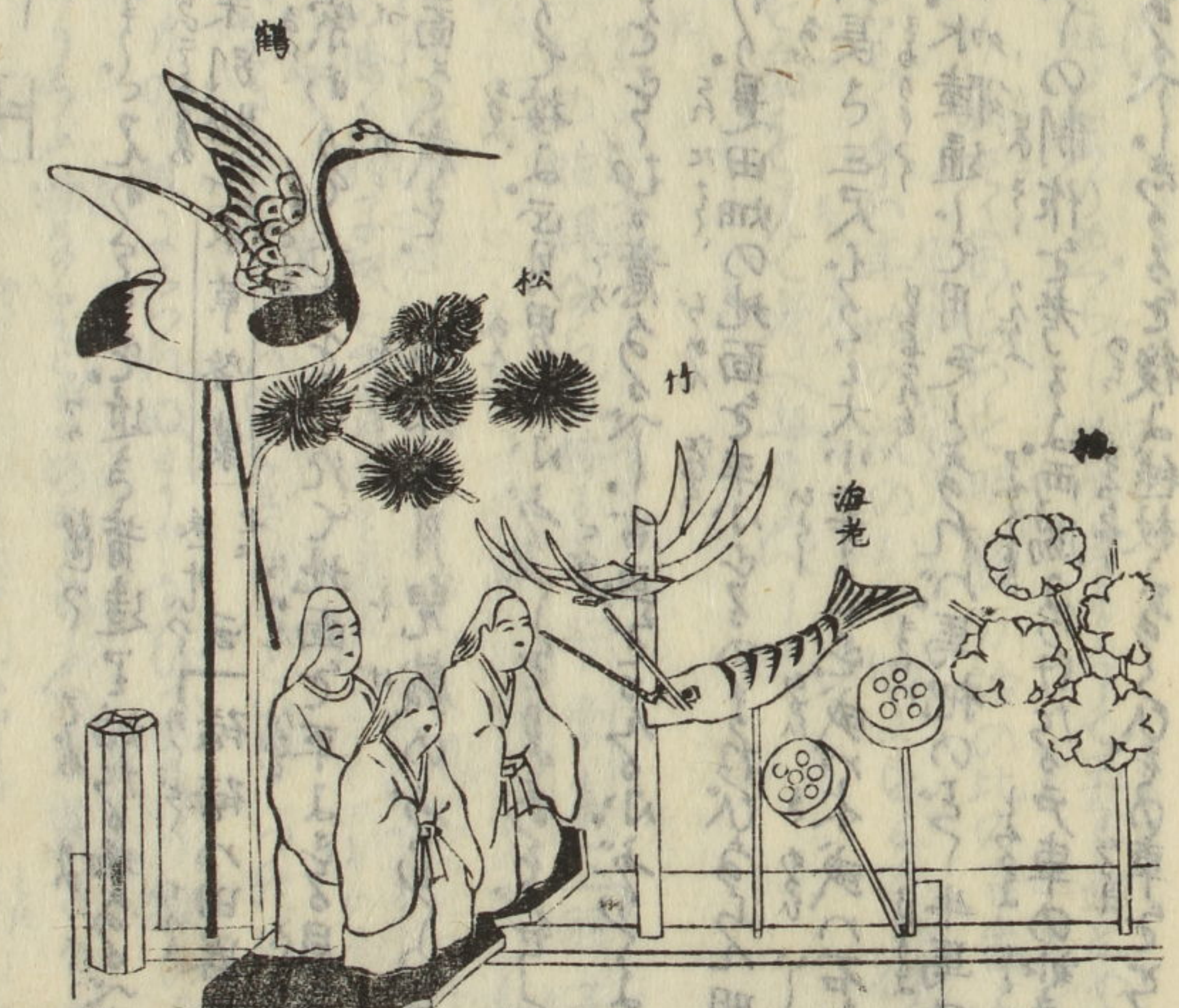
速杖せいじょうの柄えを推おしの柄え

正月しょうげつ童どう上じやう編へん下げ之の前まへ四し

滑なめ音ね雜ざつ談だん 卷まき之の一いつよ... 當あた代しろの
 幼こ児どもの... 紙かみ上じやう又また海うみ

板いたの貼はり... 鶴つる亀かめ松しょう竹たけ... 造つくり
 徳とく三さん和わ漢かん三さん才さい會かいと同時どうじの
 徳とく三さん和わ漢かん三さん才さい會かいと同時どうじの
 徳とく三さん和わ漢かん三さん才さい會かいと同時どうじの

〇これ京師きやうしの人ひとの月つきあかり
 昔むかしの東あづま国くにの...
 りの... 其その真ま実まを...
 ぐりぐりの...



推おし杖じょうの... 年とし徳とく神かみ
 扇あふみと... 人ひと形かたち
 玉たまの...

ぐりぐりの名は古き書にいまもぞえのしらざらざら近き昔造り始たる物あるべし。毬杖と
 同物とぞるひびがらとて元来別物に本草啓蒙 卷廿の云「碌碠の田器あり。形凡の
 如く七六稜あり。兩頭は索あり。土上をひいて地面を平よする具あり。三才
 畜會授時通考等も畜を載と。本邦正月兒戲のぐりぐりの形は家
 りの醒 云今此説よりて按よ正月男兒小ぐりぐりをめそのぐりぐり年始は農
 業のよびをよせ農事をとむる意あるべし。古画をみる小ぐりぐり紐をつけ
 地上をひく体をかやく画けり。是田畑の地面を平小よするのまねびあらん明王圻が三
 才畜會を考ふる礪碠の長さ三尺と云ふ大小等ならん或は木或は石をよけくま
 畜力を用て田疇の土を打水陸通して用之とされれば馬把のどく牛馬の尻小ほけ
 からある物あるべし。○ぐりぐりの制作を考ふる西脇につけたる戸車の如きりのいえ
 地をひく料の車もそのしるるべし。まゝるを後毬杖とありひその車をとり放ちく

投る玉と。がまぐの紐を持つてありせら推のうりうり玉を打どめりもろい。
 毬杖とある物のやうにありけだたよあらつて明曆万治の比の古畜を見て推
 當心さありり。前よとてとて。今午年始の祝のちり物よとるの。竹の野用も
 あるののとあれ。左よと畜をて考へせり。

○羽子板 三

正月女児のりそめその羽子板の始詳あらど。按るよ 下学集 羽子板 正月
 かくのぐらとあぶめをつけり。前よとてとて。下学集の文安元年の各あぶめは羽子板の
 今文化十年より。かよと二百七十年ぐらと前よとてとて。物よその前よとての比よりありけ
 つらむ。 搦囊鈔 卷六 爆竹の條よ羽子板と云名のを載たり。文安三年の各。 世語問答
 天文十三 年ノ書 上の巻よ「向て云をさるあれけららのことひいてつたけらひのりある
 るゆや答られのをさるあれけららの蚊よられぬまじあひひあり。秋のそよめ。蜻
 蛉とりの虫出まきり蚊をとりり物よとるの。このり。本蓮子あどをらんがう
 がらうとらひをほけたり。それを板よしてあぶめつたがら。時とんがうぐりの



○
 此の比印行
 一休



○
 此の比印行
 京童

○
 此の比印行
 貞享五年印行
 日本歳時記

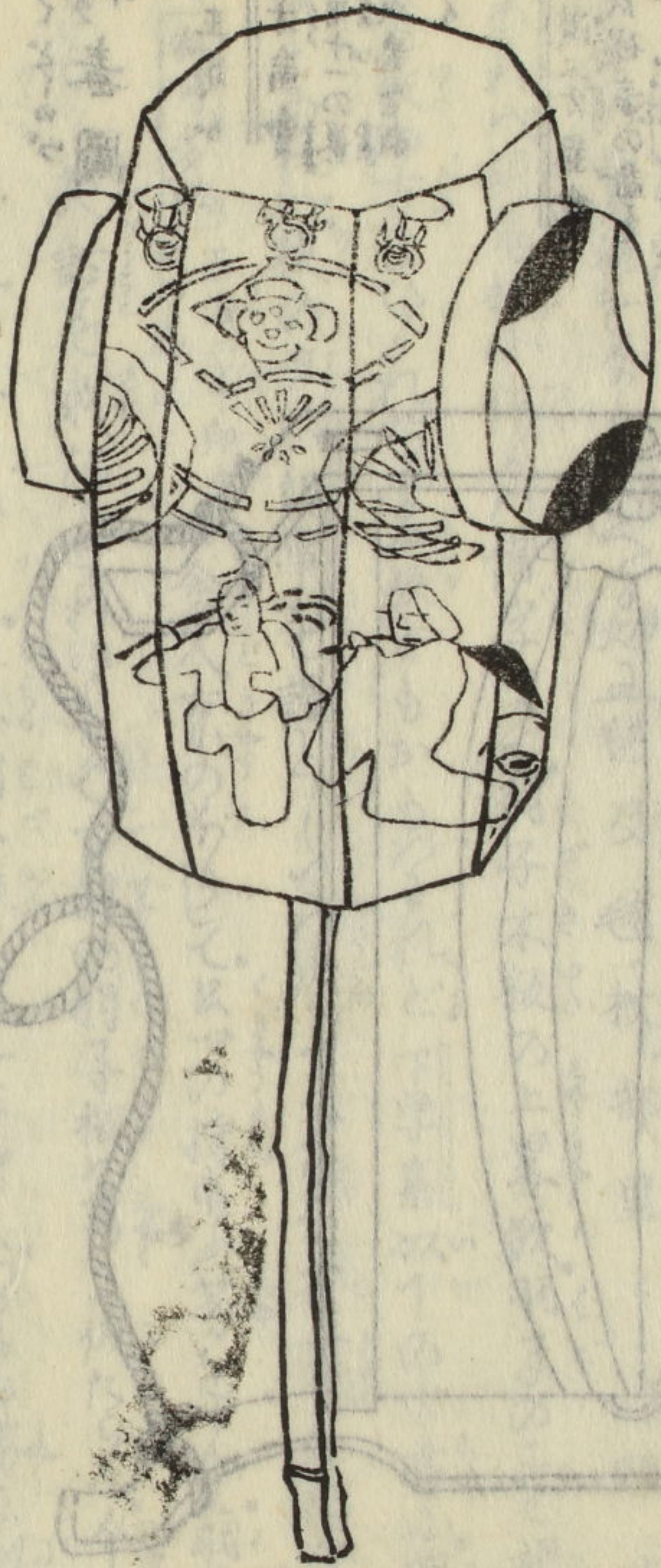


○
 此の比印行
 万治三年印行

○
 此の比印行
 世説問答

○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別

○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別



○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別

○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別

○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別

○
 此の比印行
 此書を以て種杖とぶらりと別

九已上者各取柳枝去皮彫成木刀杖を木刀とモツテカマラ以皮復モツテカマラ
外纏于刀上用火烧去皮以分黑白之花此説右の日記紀事
名曰荷花蘭密義あり再取荊棘之條挿供香火神前追加の説
次集各童手執木刀隊闘于途凡有婚久無子之婦コ
將木刀遍一身打之ウチ口念荷花蘭密必使此婦當年有アリテ
孕生男云々コト
貞享三年 著巻之一 解杖の半を去るて云「今も北國の方より杖の本として
雷盆槌のごとくある丸木に鶴亀松竹宝づうの繪を彩色幼男ども
いま産む新婦を打祝ひあり」
謂之杖木年中風俗考 貞享四年印 正月十五日の所よ云「たのこの中
大の子と云義也義あり隱相を作りて童のりてのそびとて女を祝して大の
そのこ子を持たまると云義也」
年中故事要言 貞保三年 月云「美濃國津宮の
印本巻二

四月董上編下之前十

村の正月十五日は新杖を削り其削屑の縷の如くあるを杖の頭またに殘
て名て削掛といふ是より女を答へ大の男十三人とす然らば其義を知る
者あり是も男子を生とてを求る祝と云ふありん杖の遺意あり ○さて下は
畚を削り北越より祝本とるげし杖の遺意あり今造る杖あるを勝軍
本又勝の本或は胡桃木を造り春初男兒ある方からりつるを餅花ともよ
つ所は掛並小正月といふて男兒らまをたがきて新婦あるをよもま
新婦の腰を打まひびをて子を孕まひとて又祝とて彼地の方言
小正月十四十五十六日をさして小正月といふて不よりて祝棒とも削掛とも
いふてこれれ全く古代の物也杖の遺俗あり日次紀事婦人養草より
とるつら是あり勝軍本と云へ白膠木のことで

和訓栞 ぬのげ糸の条よ云「諸國とも新婦を遣へ正月よふとたきと
新余のの神宮ありと云へり云々」

同巻 又云「雪山つらせ給ひひなむそびあむじりうらもゆとみせ

なすまらり給云く」この巻のひなむそびあむじりうらもゆとみせの

よとみせのつらせ給ひひなむそびあむじりうらもゆとみせ

の春沖堂開白道長久の沖子中將長家て九年十又むらうりよて

侍從中納言行成てのひめ君

九年十二むらりあるをまじりてやとらむきたりりて沖堂屋の

ちのひひめを給れば沖堂屋の沖子「ひひめをそびのやうそか

大と給のおまへひひめを

よとみせのつらせ給ひひなむそびあむじりうらもゆとみせ

ひひめをそびにさ給へる」秋衣 卷三

あら給へるやとら給ひてらあこれあそびとほり

まうらんり「ひひ宮のおなくお給へるあそび物ともえとまらん云く」

大内「ありあへるあわりさめをらるあよ云」ひひあを

上の巻よ云」同書 卷四

増鏡 三神山の條よ仁治二年 四條院 代帝 沖年十一

流元服ひんがの故撰政教実公の娘君九才よりありあかあか女所にょよまありありあ所
まうたの事ことをさるさるまよ「女所にょもままああくくららひひささううかかととすすれれびびままああををびびの
中ちゆうううぞぞアアええをを結結ひひけるける云云」源氏をわきまに比しうり治の年まきくとあまふれがなよそ二百三
とれらの文ぶんどもどもをかかめめひひささううててららみみののひひささまま拵拵ひひののささめめととああるるべべ。

○雑の調度 十一

紫式部日記 上 上東門院皇子を産めひし事をさるさる条じょうよ「ワラ宮の侍

まうあひハ一納言の君ひんぐにまありささううららひひささたたいい流りゅうささららどもども流りゅう著
ののだだいいささららぬぬままああららももひひささまま拵拵ひひののぐぐととええゆゆ」あまの誕生の日は宮中まきとあまふれがなよそ二百三

の母ははににアアええととらられれひひまま拵拵ひひのの具ぐよよららひひままのの調度
膳ぜん梳す鴻こう基き中ちゆうううののめめののああららううありあり一一拵拵ままうう。

枕草紙 巻第一 ぬいひしきめの
ゆゆれれららののああひひひひささまま拵拵ひひののささめめととええゆゆ」あまの誕生の日は宮中まきとあまふれがなよそ二百三

源中納言物語 二の巻よま「はごりりああにに娘君むすめよよありありひひれればば流りゅう袴はかま着き

ままんんででんんににううららううままりりああららままままひひんんぐぐああままにに娘君むすめのの流りゅう方かたららととええららひひささたたいい流りゅう調度

骨董上編 下之筋十六

ともよびまのそびのやうにまうらひてまま」られうらわよつきたる古俗とらひの古俗ともよびまのそびのやうにまうらひてま
調度てうどももううららううたたののたたととりりそそののままののひひののまま宮中みやちゆう中ちゆうんんららととああままふふれれががななよよそそのの造ぞうりり一一ままららぶぶららのの民たみのの童どうののひひまま拵拵ひひののささめめととええゆゆ」あまの誕生の日は宮中まきとあまふれがなよそ二百三
管素くわんそ ろろりりきき

○USお女 十二

あけらの日記 下の巻よま「げげああけるけるららめめももささららううてておおねねとと流りゅう方かたららととええららひひささたたいい流りゅう調度

ままららぶぶららううららううももああままももととああめめひひててひひささたたれれががああららのの女むすめららままららぶぶららううららひひささたたいい流りゅう調度

たたままららぶぶららううららううああれれたたははくくととううららままららぶぶららううららひひささたたいい流りゅう調度

ささええおおととりりののひひささままららぶぶららううららひひささたたいい流りゅう調度

ららああららぶぶららううららううあありりけんけんかかららままららぶぶららううららひひささたたいい流りゅう調度

ままららぶぶららううののここららももららぶぶららううららひひささたたいい流りゅう調度

ままららぶぶららうう又また

ああららままれれううははぬぬささううららああららううららひひささたたいい流りゅう調度

又

かつた^{とら}裁^裁やとぞ^{とら}らる^{らる}ち^ちやある^{ある}む^むを^をひ^ひく^くよ^よた^たの^のむ^むと^とあ^あぶ^ぶ
 按^おる^およ^よわ^わく^くよ^よま^まれ^れく^くら^らげ^げ日記^{日記}の^の作^作者^者東^東三^三條^條撰^撰政^政兼^兼家^家公^公の^の室^室道^道綱^綱マ
 の^の母^母あり^{あり}公^公の^の寵^寵お^おと^とろ^ろく^くた^たる^るを^をあ^あげ^げき^きて^て是^是等^等の^の哥^哥あり^{あり}ら^らよ^よひ^ひる^る衣^衣と
 して^{して}今^今雛^雛形^形と^とり^りあ^あぐ^ぐと^とら^らひ^ひと^とき^き衣^衣服^服ある^るべ^べし^しそれ^{それ}を^をこ^こ織^織く^く下^下前^前よ
 右^右の^の哥^哥を^を一^一首^首づ^づめ^めた^たつ^つて^て女^女神^神よ^よ進^進た^たる^るあり^{あり}今^今の^の世^世の^の女^女の^の童^童栗^栗活^活の^の衣^衣神
 と^と女^女神^神あり^{あり}と^とて^て紙^紙雛^雛ひ^ひの^の衣^衣形^形袖^袖形^形又^又の^の浮^浮せ^せ袋^袋ら^らを^を猿^猿多^多と^と進^進る^るに
 ら^られ^れら^らの^の遺^遺意^意よ^よや^やあ^あら^らん^んご^ごう^うに^にこ^こら^らの^のめ^めさ^さる^る葉^葉よ^よら^ら右^右き^き半^半ぞ^ぞあ^あら
 する^る○栗^栗嶋^嶋の^の衣^衣神^神少^少彦^彦名^名命^命の^の高^高皇^皇産^産靈^靈尊^尊の^の指^指間^間ら^ら漏^漏墮^墮ぬ^ぬひ^ひ
 や^やど^どの^のら^らひ^ひと^とき^き衣^衣あ^あら^られ^れが^が雛^雛を^をた^たく^くも^もら^らる^るも^もら^らよ^よま^まき^きよ^よら^らあ^あら^ら
 する^る

○古製雛圖

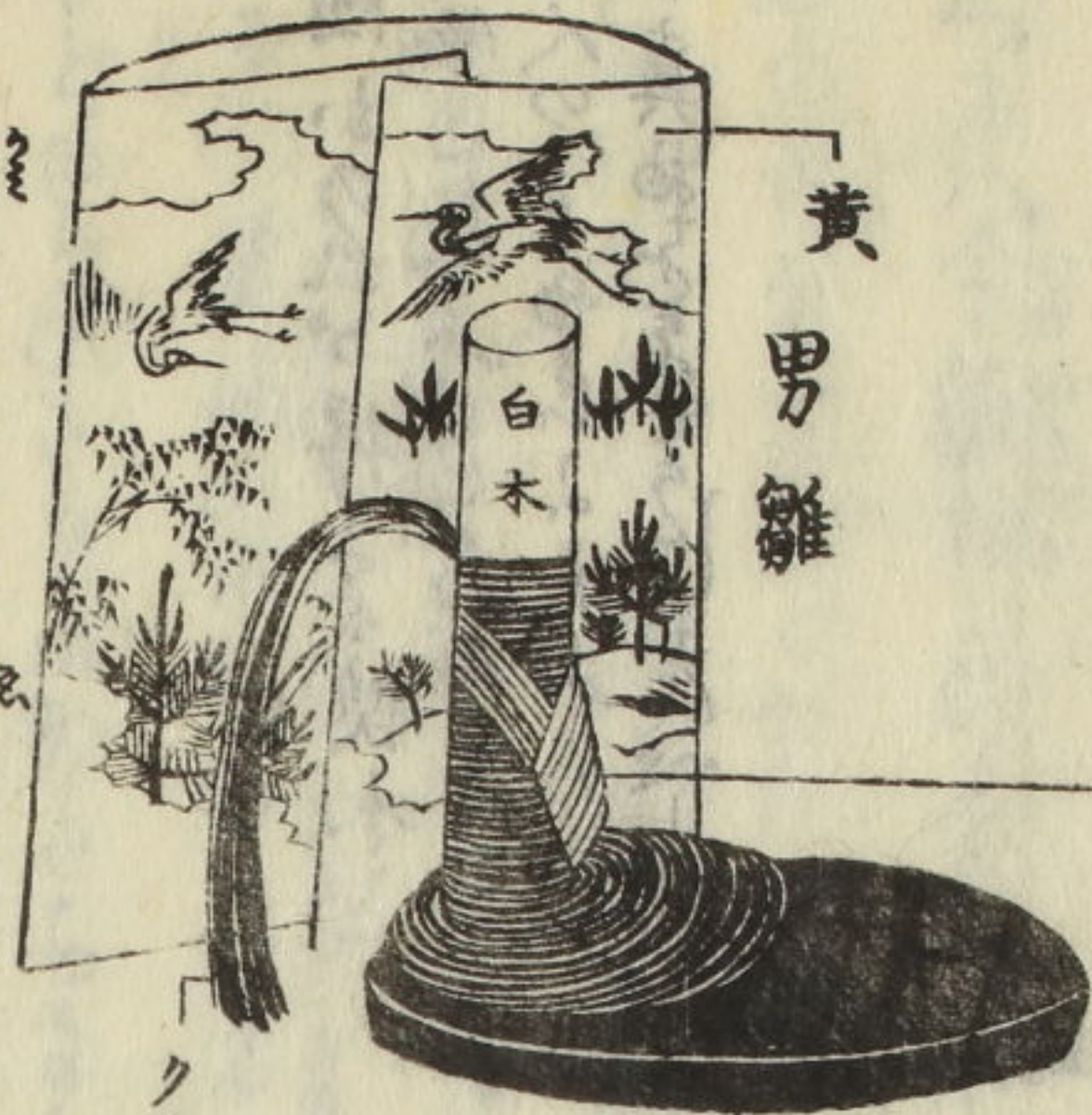
此圖おのれが得たる模本と
 真物とたがひらるるものと
 ありしりしものよとらるるもの
 地日真物とらるるもの

源氏物語

若紫の巻に
 雛の衣は
 栗嶋の衣神少彦名命の
 高皇産靈尊の指間ら漏墮ぬひ
 やどりのらひととき衣あられが雛をたくもらるもらよまきよらあ
 する

○古製及雛又一種 十四

四国のうらに此古製のこれる
 一ははらうらる意外一はこ
 めのうらうらる雅致の
 おここれも又珍重とべし

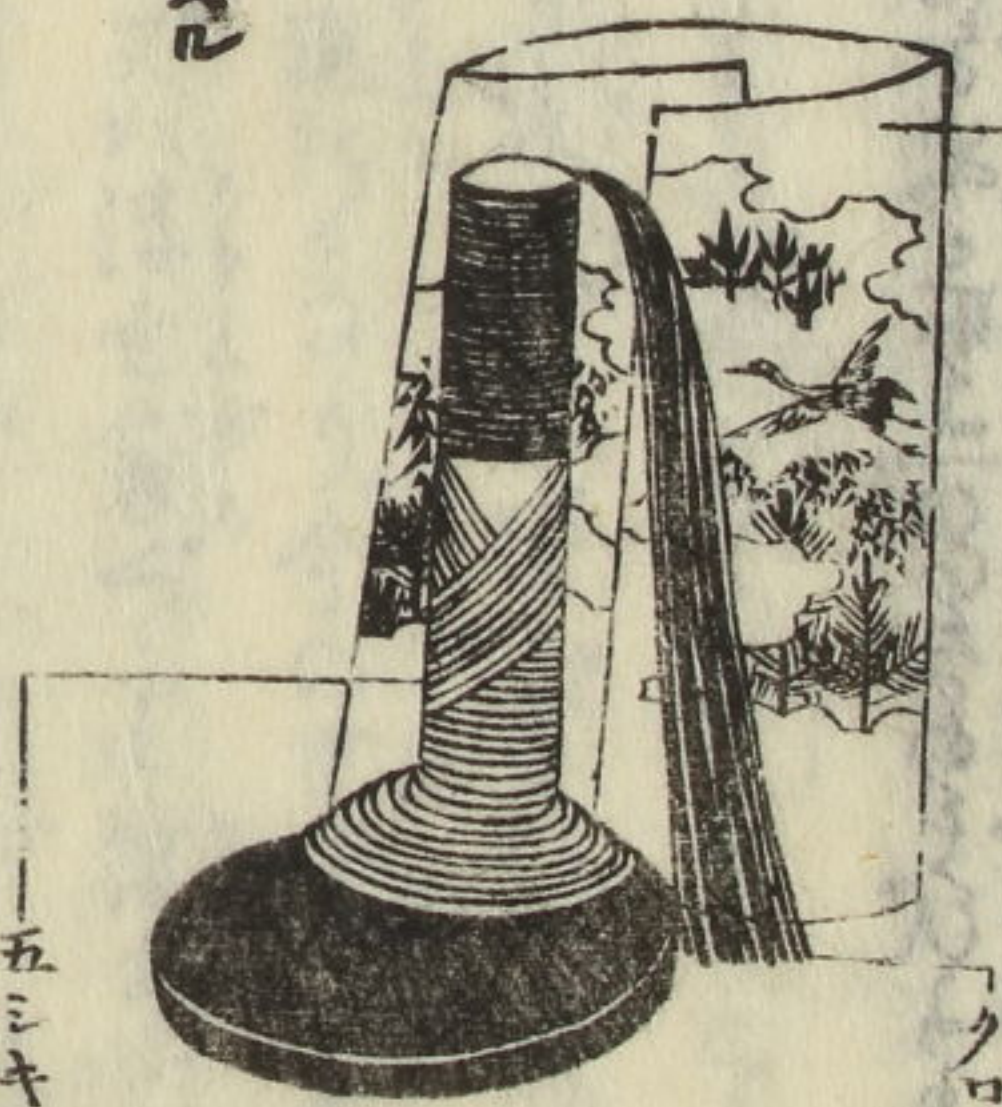


○紙は唐紙松竹の繪とあり
 丹波のうらうらわのうらうら
 なるうらうらうらうらうら
 とぞこれ家敷のうらうら

五ミキノ
 糸、ミク

墨ニテ
 クロクミ

雛 女



寫山楼所藏

クロキ糸

五ミキノ糸ヲマク

○高サ曲尺一尺二寸むらり
 黒き糸よくまはたるハ髪ノ毛の
 らるあべり糸色の糸よくまは
 たるあべり糸領のころころのべり
 ○男びるハうら糸をうらうら
 かつと女びるハうら糸をうらうら
 かつと男女をうらうら
 ○大小異同精殊もあべり

骨董上編 下之前十八

○室町家の比の雛台 十五

ひいみみうらうら
 伝来の
 白糸
 あれど
 ころも
 かわら

高サ約
 三寸
 五分余



白ひら
 紐

同背図



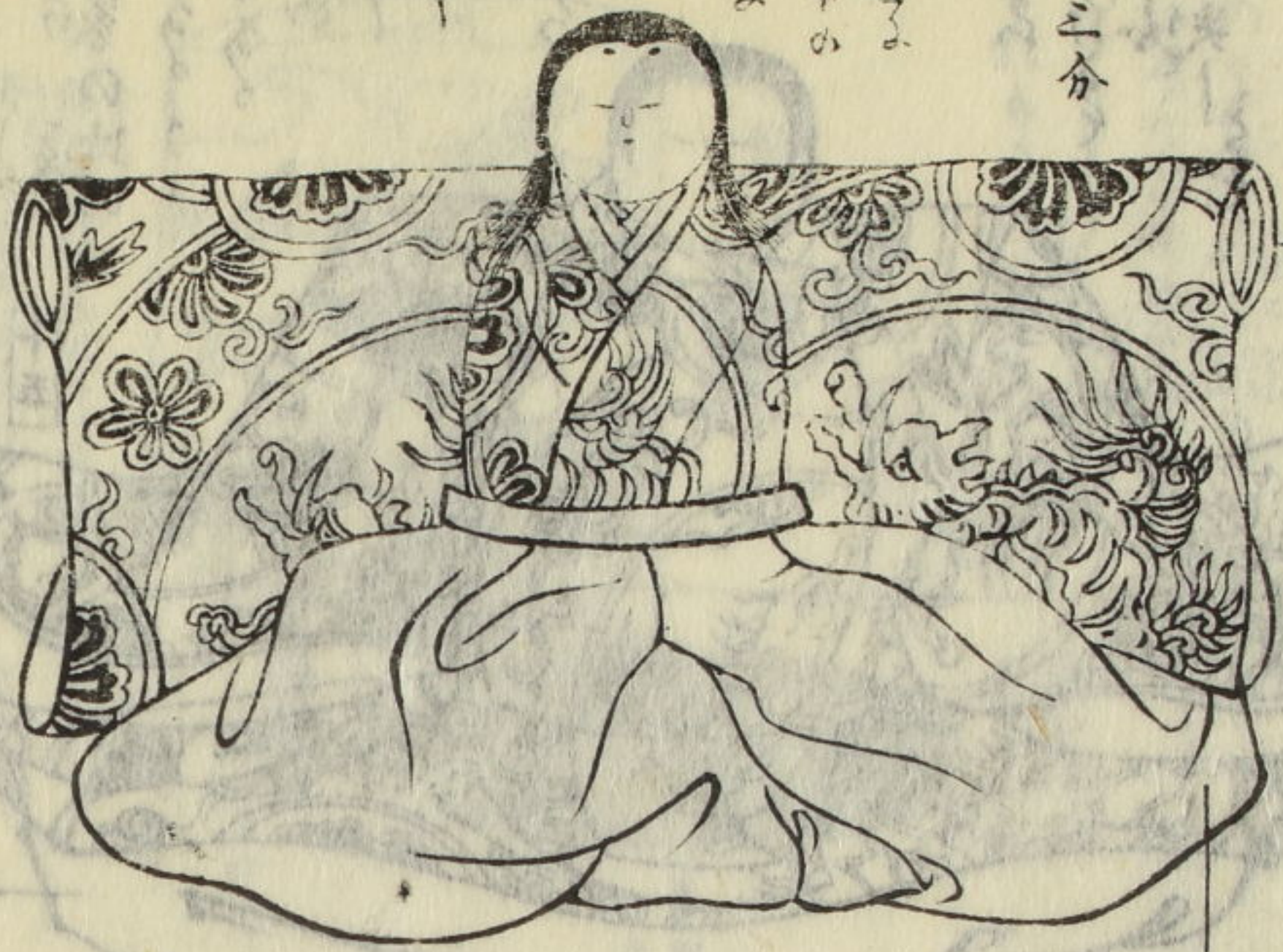
時得庵所藏

裾のつ
 飾り

裾を長く
 ひくこれハ
 15寸を
 たる糸を
 うら

○同女離音

高サ
三廿二分



袴紅絹

袴紅絹

○同背図



袴紅絹

○今の世に一種かやの丸さひのありありの遺制あり

たのしうしんをりえーたり

掛るよ
ひろまら家の
比ひひ
花びり
三月三日
時をれはこれい
上さのそのりてはひ
ちのひまのり

たのしうしんをりえーたり

骨董上編下之前九

○伊勢の小米離

十六

離花の記

全一冊寛延二年印行

伊勢の祇宮久昔より女子のりてはび草よ小米
ひのさしをらひさき男女乃人形を作り岐宜とて衣服をまかせ家基乃
上は居並て主婦ひつゆれた粧ひをなりてはびとてはび云くといえたり
おのれけ事を伊勢山田の某氏よりひよ伊勢山田のりた直より傳へ
て安永平日の離花びよ小米離とて又六分許の紙びるを造りその衣服小
さるものさきとひ中一才許長と二才許のらひさきさきの子るあらの紙よ
丹青のて文様をりらり或は行成紙などをらひさきさきさきの子るあらの
さきさきさきのきれさきを添て衣領つきをさきさきさきの子るあらの
巾ひらき一ひらの紙よ坐敷客間居間臺所など家のさきさきさきさきさき
主婦或は婢女奴僕などほりてそのさきさきさきさきさきさきさきさき
人家平日のさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

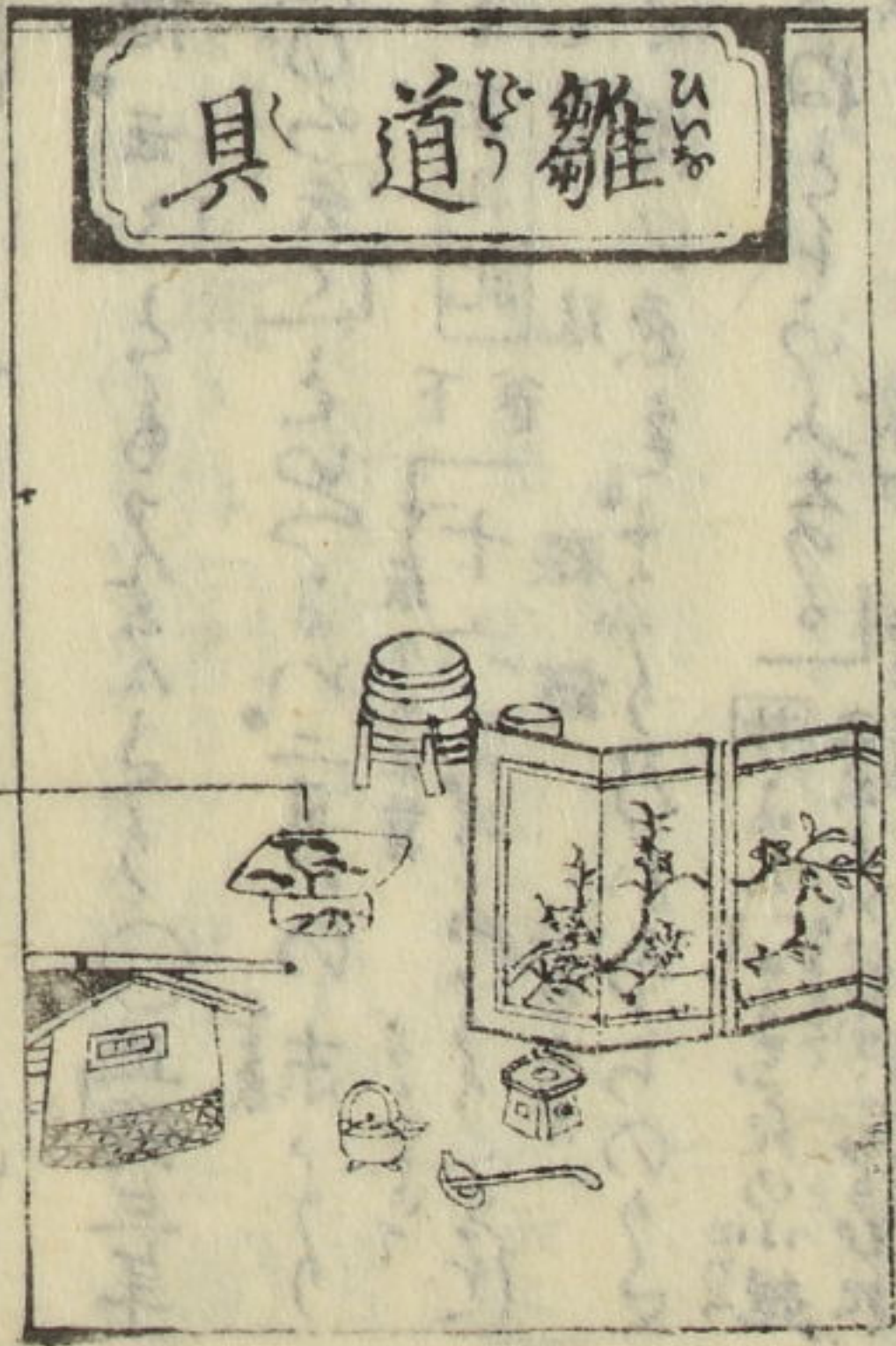
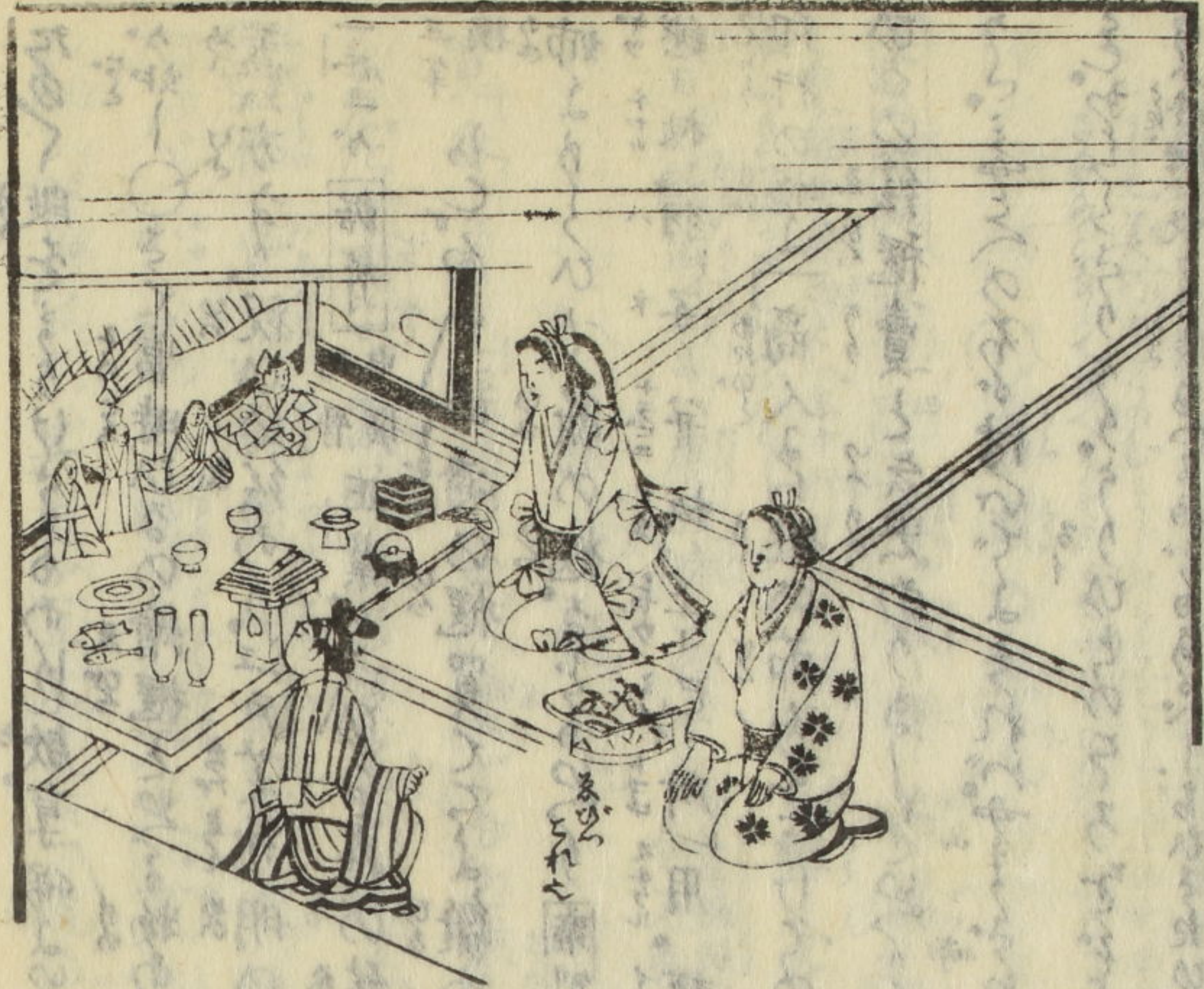
古代のひいな遊びの平日の玩あらしむる前より三月三日を期として
その比類詳るるに塵添盛囊鈔文安三年著卷之一は五節供の事を云ふこと
三月の節供の処は雛の事と見えざれば文安の比ひまは上巳の雛あり
あべし又拾芥抄上之巻は歳時部をまゐひたれど上巳の雛と見えざれば
世説問答は民間の年中行事童謡のひまを裁多ひたすこと三月
三日の條は桃の酒よりぎの餅雞合むこととひいな遊びのひま見えざれば
天文十二年に續妙はひいなと興命見えたり上巳の雛は天文の比ひま
ありしあべし無言抄「雛人形の事也」とのありて季をさへむと雜は各
天正七年より二とせのまりふこれを記すとあれば天正の比ひまは三月三日かざ
まらざりし御傘うも雛を雜とて晴山の井寛文二年卯行三月三日の條はひいな
はこそ此の期もあらねば打まをせと雜るるべしと但聊ひいなひわは比の條は
さて今日のひまもぬべしとあり是等を合せ考ふるは三月三日を期とせし

骨董上編下之前五

あまがつの
考へ別あり
あまがつの
考へ別あり

とわねぬるあべし天正以後のひなは三月三日の巳の月水辺は祓とる事和漢
ともよ古一源氏物語次磨の巻は源氏須廣へ尤近の時三月の朔日巳の日
まは浦辺は出陰陽師をめて祓とるをひいな舟とて人形をのせて流さ
はひいなええ加茂保憲女集「あべねはあまがつとあまがつといふその人
のあまをさくらん」あまがつは上巳の祓は天兒を水に流さるるもありしあべし
後きよ三月上旬巳を雛托の期とせし是ホの遺意よく天兒母子ホの贖物は酒
食を供はるるの凶事を是よかりせかのれくが身を祝ひかや古の雛遊びの方
よりつりてつひに今の如くよるるあべし國朝佳節録三月三日兒女
制紙一人為翫者贖物之義乃祓具也云々とつり然則原潔
身の神事より起りたれば今のきよの雛托といふを雛祭と稱るも縁あり
あまがつといふこと

○古のひいな遊びはあまがつといふこと今もあまがつといふこと
夫よりあまがつといふ男の外をさへあまがつといふ女の内をさへあまがつといふこと
あまがつといふこと



當時のひまはひのり
段をまうけだた座上よ
渡物してとまあくのまのり
よもひの質素をとりへ

骨董上編下之前二五

○元禄十年印本 鳥居清信が
ゆける後のうちらひの圖あり



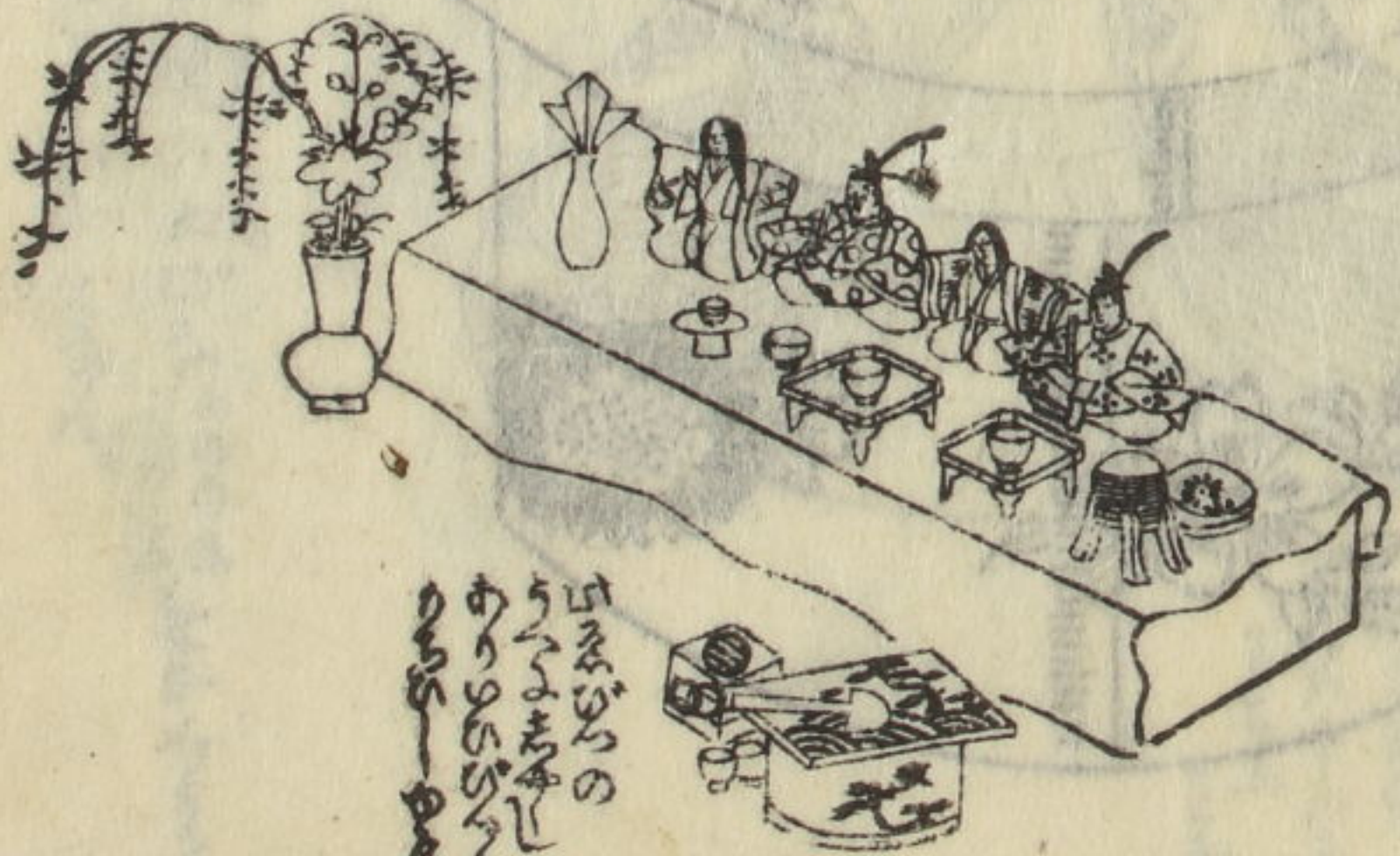
○寛延二年印本
新注の記に載る
弦ひらの圖



○享保十七年印本

女中風俗上鏡に
載る會之當時の

かひのりこころ
一段をまうけ



接るあひのり
這子紙ひのり
今もひのり
まてあひのり
とそれの跡あり

○寛延二年印本
新注の記に載る
弦ひらの圖

かひのり
一段をまうけ

諸国奇遊談

寛政十一年刻

年刻

はなごころのついで

「今も洛北の村里より三月の節句まで」

必用ふ予が幼時ころ、宝曆のまゝに較ぶても

用ひゆゑ二月の末より賣りのきつて

うらふ今になえてはあらざらん

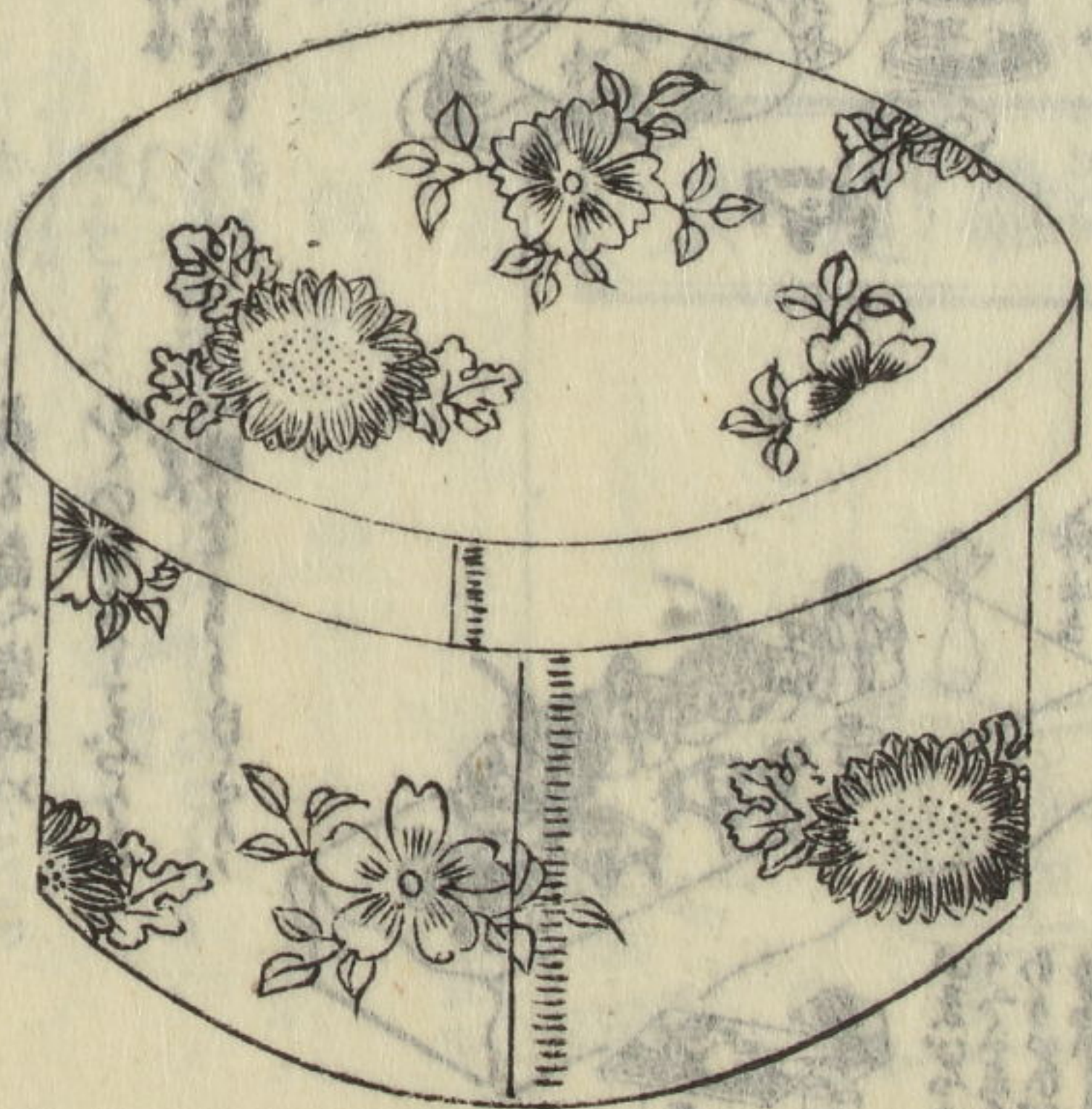
とる遠國又洛北の今の形を

とふまゝに」といひて此畵を出せり。

○醒 按るよ此はびつと櫻と菊を

サツルは三月のひなと九月の後のひなと

うひたる後あるべしとれ近世の制さればいひ



骨董上編下之町

○享保の比の土雛畵

二十



尚志堂所藏



とて土をりしはくを焼く胡粉丹緑青
あどまていろどりのがくう右色あり
かうと享保前後の物と見え
際草かきよりのやわらん
びりの質素と
えられたり

今も保草
よて土の
内裏ひなを
つゝ田舎
うらなれを
りしふ
しそ

今も田舎より女子生れくつめらの三月の節句は江戸の今戸焼の土ひなをまうりて
祝ふうとにりく古格の田舎よのそれり奥列の田舎も土ひなをもちあふとらん

○ 雛使 命 三十二

ひらひら物語 雛使と云 昔の三月云々
 女の雛抱とてひらひらとあぶり食事をそとるく
 いろくの器諸道具をわたり草餅を
 ひらの不うい入醴を揚入小蛤ホを
 びら節白の礼とてひらを系物よのせ
 袴不の拍せ親類へ悉くつらと是
 成人の時敷入して世帯持の誓古あり
 當分のあそびにあつと云 ありつること此命よ
 うのありひらひらのつひとひらのひらひら
 中の品よりあそぶあひらひらとてあそび
 ひらひら雛よあそびけをもちひたり今もあそび
 大け節白あまひらひをほくまといふあり
 だり 本朝食盤 元禄八撰 白酒云々
 俗 三月三日 爲節物供雛
 祭とあられそのあそびも白酒をも用ひたり
 元禄十六年印行
 俳諧 日本国

○ 天和貞享の比菱川阿宜がわける
 車中行事の印本よ此高あり



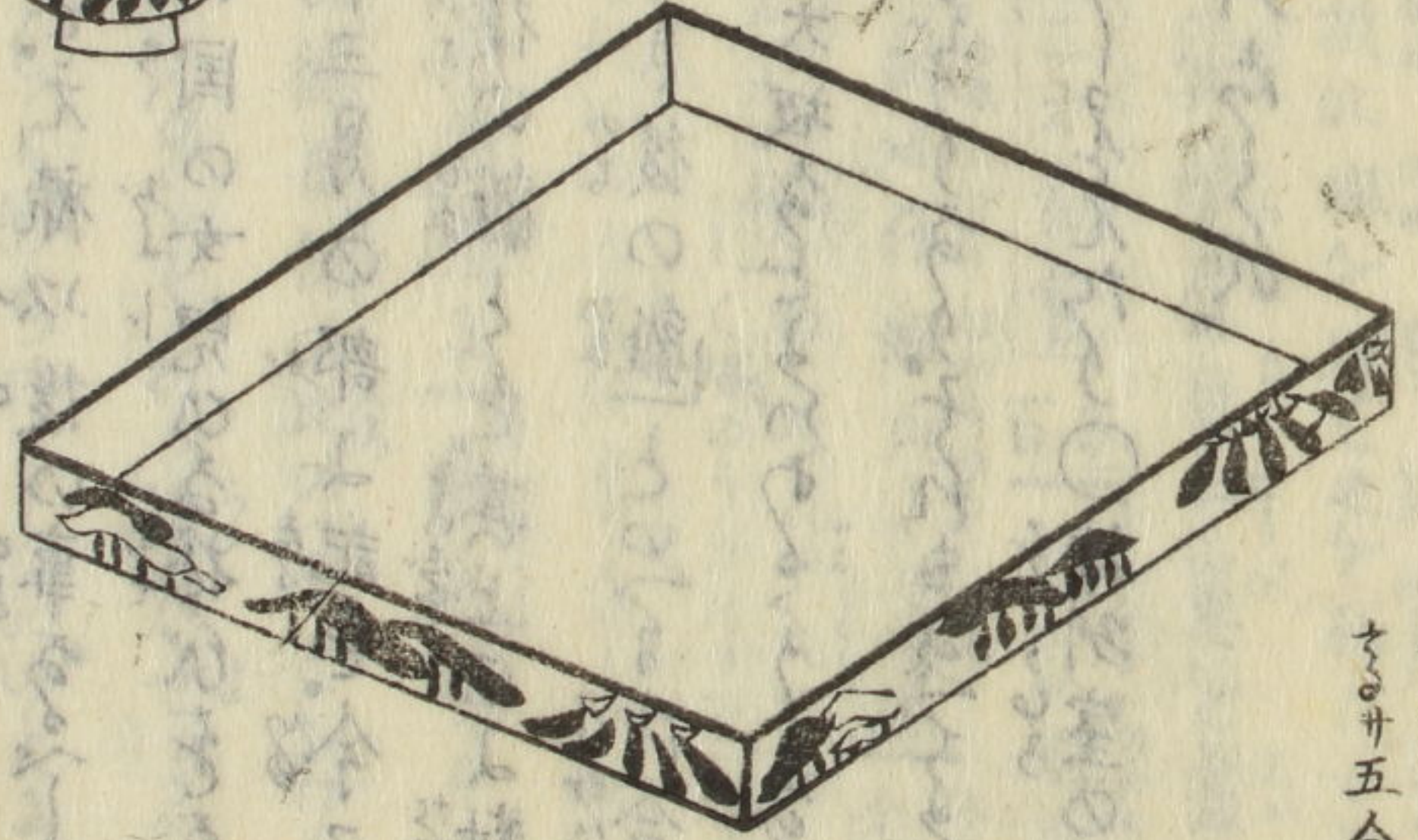
骨董上編 下之前五

あや 奥海きまの上的のりかき
 甘白 ひら 雛のつひの酒の弱尾 布名

○ 雛 椀 折敷 圖 三十三

椀の挽物の本地あり折敷の片木の
 ところのつきめのよも粗糲よほくま
 られも本地あり丹緑青よも松竹の
 絵あり京師あり明和安永の比
 ま心ありひらひら 絵ひつと
 あまぐく古た物よとあそび
 質素よとて雅致あり

椀 一分余
 折敷 五十分
 けしきとめ
 とうれり



京都青李庵藏

折敷 方 五十分

